

【基礎編】第10回 コミュニケーション支援の基礎

◆ 研修資料(受講者配布用) ◆

1. はじめに:コミュニケーションの「本質」とは?

「コミュニケーション」と聞くと、私たちはつい「言葉を流暢に話すこと」をイメージしがちです。しかし、その本質は「自分の意思を相手に伝え、相手の意思を理解すること」にあります。その手段は、言葉だけではありません。指差し、表情、身振り、絵カード、そして行動そのものも、すべてが大切なコミュニケーションの手段です。

ABAでは、このようなコミュニケーション行動全般を「言語行動(Verbal Behavior)」と呼びます。これは「話すこと」だけを指すのではなく、他者を介して自分の望む結果を得るための、あらゆる行動を含みます。

私たちの役割は、子どもにただ単語を暗記させることではありません。子どもが「伝えたい!」と思った時に、その子に合った方法で、その意思を表現する手助けをすることです。

2. 言語行動(Verbal Behavior)の機能:言葉の「使い道」

同じ「りんご」という言葉でも、その「使い道(機能)」は様々です。ABAでは、言語行動を主に以下の機能に分類して考えます。この視点を持つことで、子どものコミュニケーションをより深く理解できます。

機能	説明	子どもの行動例	支援のポイント
マンド (Mand)	要求すること。何かを「欲しい」「してほしい」と伝える。	・棚の上のりんごを指差し「りんご」と言う。・「とって」と言う。	最も重要で、最初に教えるべき機能。子どものモチベーションが全ての土台となる。
タクト (Tacting)	報告すること。見たり聞いたりしたことを、そのまま言葉にする。「あれは～だ」	・絵本の中のりんごを指差し「りんご」と言う。・外を走る犬を見て「わんわん」と言う。	子どもの世界を共有し、語彙を広げる。
エコーイック (Echoic)	模倣すること。聞いた言葉をそのままオウム返しする。	・大人が「りんご」と言ったら、続いて「りんご」と言う。	新しい言葉を教える際の入り口となる。
イントラバーバル	言語的なやりとりを	・「好きな果物は?」	コミュニケーションの

(Intraverbal)	すること。質問に答えたり、会話を続けたりする。	→「りんご」と答える。「りんごと言えば?」→「あかい」と答える。	幅を広げ、社会性を育む。
---------------	-------------------------	----------------------------------	--------------

3. 言葉だけに頼らない支援: AACの活用

発語が難しい、あるいは言葉だけではコミュニケーションが円滑にいかない子どもにとって、AAC(Augmentative and Alternative Communication: 拡大代替コミュニケーション)は非常に強力なツールです。

- AACとは?: 話すこと以外の、コミュニケーションを補ったり、代わりになつたりする、あらゆる方法のこと。
- なぜ必要?: 言葉が出ないことで「伝えられない」という経験が続くと、子どもは意欲を失い、かんしゃくなどの問題行動に繋がることがあります。AACは、子どもに「伝わった!」という成功体験を保障し、コミュニケーション意欲を維持・向上させるために不可欠です。
- 代表的なAAC: PECS®(ペックス)
 - PECS(Picture Exchange Communication System)とは、絵カードを使って、自発的に要求を伝えることから始める、体系的なコミュニケーション指導法です。
 - 特徴:
 1. 自発性を最優先: 子どもが「欲しい!」と思った時に、自ら絵カードを相手に「渡す」という行動から教えます。
 2. 社会的相互作用: 必ず「相手」にカードを渡す必要があるため、自然と他者を意識したコミュニケーションが成立します。
 3. 発語を妨げない: 研究により、PECSの使用が発語を促すことも示されています。カードを渡しながら、支援者が「りんごだね」とモデルを示すことで、音声言語と意味が結びつきやすくなります。
- サインやジェスチャーの活用
 - 特別な道具がなくても、いつでもどこでも使える非常に便利なAACです。
 - 「ちょうどいい」「おしまい」「もっと」など、日常生活で頻繁に使う言葉から導入するのが効果的です。
 - モデリング(大人がやってみせる)を通して、楽しく教えていきましょう。

4. NBDIとコミュニケーション支援

前回学んだNBDIのアプローチは、特に自発的なコミュニケーション(マンド)を教えるのに最適です。

- 環境設定で「伝えたい!」を引き出す
 - 好きなおやつを透明な容器に入れ、蓋を固く閉めておく。(→「あけて」というマンドの機会)
 - ブランコを揺らしてあげ、楽しいところでピタッと止める。(→「もっと」というマンドの機会)
- タイムディレイで「自発性」を待つ
 - 子どもが何かを欲しそうにこちらを見たら、すぐに与えずに、にこやかに数秒待つ。子どもが何か声を出したり、身振りをしたりするのを引き出します。

- インシデンタル・ティーチングで「表現」を豊かにする
 - 子どもが「ぶーぶー」と言ったら、「そうだね、『あかいブーブー』だね」と少しだけ豊かなモデルを示し(言語拡張)、語彙や文法を自然な形でインプットします。
-

◆ 講師用原稿 ◆

(スライド1: タイトル)

「皆さん、こんにちは。研修第10回を始めます。前回は、NBDIという自然な関わりの中で学びを引き出す実践技術を学びました。今日は、そのNBDIを最大限に活用する領域の一つである、『コミュニケーション支援』に焦点を当てます。言葉の発達をどう捉え、言葉に課題のある子に、私たちはどのような支援ができるのか、その基礎を学びましょう。」

(スライド2: はじめに) 10分

「皆さんには、『コミュニケーションが上手』と聞くと、どんな人を思い浮かべますか？…おしゃべりが得意な人、面白い話ができる人、かもしれませんね。でも、私たちの支援の現場で考えるべきコミュニケーションの本質は、もっとシンプルです。それは『伝えたいことが、伝わること』。その手段は問いません。」

「ABAでは、この『伝える』ための全ての行動を『言語行動』と呼びます。この視点を持つと、まだ話せない子が指をさす行動も、かんしゃくを起こす行動でさえも、彼らなりの必死の『言語行動』、つまりメッセージなのだと理解できます。私たちの仕事は、そのメッセージをより分かりやすく、より社会的な方法に翻訳してあげるお手伝いをすることです。」

(スライド3: 言語行動の機能) 25分

「その言語行動を、さらに深く理解するための『メガネ』が、この4つの機能分類です。(スライドを指しながら) マンド、タクト、エコーイック、イントラバーバル。特に、私たちが最初に、そして最も大切にすべきなのが、一番上の『マンド(要求)』です。」

「なぜなら、マンドは子どもの『欲求』という、最も強いモチベーションに基づいているからです。『りんごを見て「りんご」と言う(タクト)』ことよりも、『りんごが欲しくて「りんご」と言う(マンド)』方が、子どもにとっては遙かに切実で、学ぶ意欲も高くなります。私たちの支援は、まず『これを言えば、良いことがある！』という、言葉の持つ力を子どもに実感させてあげることから始まります。つまり、マンドを育てるところからスタートするのです。」

(スライド4: AACの活用) 30分

「では、発語が難しい子に対して、私たちはどうやってマンドを育てればいいのでしょうか。その答えが、AAC、拡大代替コミュニケーションです。」

「言葉が出ないからといって、伝えたい気持ちがないわけではありません。むしろ、その気持ちを表現する手段がないことで、子どもは大きなストレスを抱えています。AACは、その子の口の代わりとなり、『伝わった！』という喜びと安心感を与えてくれる、命綱のようなものです。」

(スライド5: PECSとサイン)

「その代表例が、このPECS(ペックス)です。(スライドの絵を見せながら) PECSの素晴らしい点は、子どもが自ら絵カードを『相手に渡す』という、非常に分かりやすい行動からスタートする点です。これにより、コミュニケーションは一方通行ではなく、必ず『相手』が必要な社会的な活動なのだということを、体験的に学んでいきます。」

「また、サインやジェスチャーも強力なツールです。『おしまい』のサインを知っているだけで、子どもは活動の終わりに見通しを持つことができ、かんしゃくを起こさずに済むかもしれません。『ちようだい』のジェスチャーができるだけで、他者の物を奪わずに、自分の欲しいものを手に入れられるかも

しません。言葉以外のコミュニケーション手段が、いかに問題行動を減らし、子どもの社会参加を助けるか、という視点を持ってください。」

(スライド6: グループワーク) 25分

「では、皆さんの支援の引き出しを増やすためのワークです。」

「(ワーク)ケース:Aちゃん(3歳)。発語はまだない。ブランコが大好き。ブランコに乗ると、もっと揺らしてほしい時に、体を揺すって支援者の顔をじっと見る。

①このAちゃんの行動は、どんな『メッセージ』だと考えられますか？

②このメッセージを、より分かりやすいコミュニケーション行動に育てるために、あなたならどんな支援を計画しますか？(PECS、サイン、発声など、自由に考えてください)

グループで話し合ってみましょう。(10分程度)」

「(発表後)...素晴らしいプランですね！」

①メッセージは『もっと揺らしてほしい』というマンド。

②支援プランとして、『「もっと」のサインをモデリングする』『ブランコの絵カードを用意し、渡せたら揺らすPECSの形を取る』『揺れを止めてタイムディレイを使い、「あー」でも「うー」でも何か声が出たら揺らす』など、様々なアイデアが出ました。そうです、正解は一つではありません。この子にはどの方

法が一番合っているだろう？と、多くのアプローチを考えられることが専門性です。」

(スライド7: まとめ) 10分

「本日は、コミュニケーション支援の基礎として、言語行動の考え方と、AACの活用について学びました。

キーポイントは、①まずマンド(要求)から教えること、②言葉だけでなく、絵カードやサインなど、その子に合った手段を提供すること、③そして、それらをNBDIの自然な文脈の中で、意欲を引き出しながら教えていくこと、です。」

「コミュニケーションの支援は、子どもの『世界』を広げる支援です。『伝わった』という経験は、自己肯定感を育み、他者への信頼感を育て、社会で生きていくための最も重要な土台となります。」

「次回からは、いよいよ『集団療育』への応用がテーマになります。これまで学んだ個別の支援技術を、クラス活動やグループワークといった集団の中で、どのように活かしていくのかを考えていきましょう。

何か質問はありますか？(質疑応答)

...それでは、本日の研修はこれで終了です。お疲れ様でした。」